

### 1 自己評価及び外部評価結果

**【事業所概要(事業所記入)】**

事業所番号	4372601163		
法人名	有限会社サカイケアセンター		
事業所名	もみじ園		
所在地	熊本県合志市野々島5427-1		
自己評価作成日	R3.年1月25日	評価結果市町村受理日	令和3年3月30日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	
----------	--

**【評価機関概要(評価機関記入)】**

評価機関名	特定非営利活動法人 あすなる福祉サービス評価機構
所在地	熊本市中央区南熊本三丁目13-12-205
訪問調査日	令和3年2月24日

**【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】**

住宅街の中にあり静かな環境の中にあります。理念に基づき、「個人を尊重」を第一に考え、個人の生活リズムに合わせて、一人ひとりに応じた支援を行っています。「仲良く、楽しく」を心がけ、笑顔を忘れず、安心して暮らすことができるように、レクリエーションを取り入れたり、園外活動なども積極的に取り入れながら、季節に応じた行事なども行っています。季節を感じて頂けるように行事食の提供も行い、共に味わい、会話が弾むことも多く見受けられます。職員を信頼され顔を見るだけで安心されるご利用者様もおり、関係は良好です。家族のように親しく、家庭的な雰囲気の中で生活されています。「地域とともに」とあるように、地域の方とも交流を深め、自治会の行事への参加、施設の行事に参加して頂き、演奏会を行うってもらうなど、互いに参加することで、地域の方にも当園を知って、理解して頂けるように近所付き合いも大切にしています。

**【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】**

ホームで出会った入居者が「仲良く、楽しく」毎日を過ごしてもらえよう、一人ひとりを大切にケアを理念に掲げ、支援にあたっている。今年度は人員配置などの点から、業者による食材配達に変更されたが、専任の調理職員2名の配置により変わらぬ手作りの食事が提供され、職員も同じものを摂ることで会話も膨らみ、栄養面からも活気に繋がっている。時には入居者の好みを聞きながらホーム独自の食事メニューとしたり、代表者による竹を使ったソーメン流しは台所からリビングまでの長さで楽しまれており、ホームの風物詩として継続されている。また、排泄支援においても職員は個々のパターンを共有し、可能な限り布/パンツで過ごせるよう取り組んでおり、100歳になられても自ら「夜間もトイレでしたい!」の要望に、ポータブルトイレでの支援に努めている。敷地内にある菜園でほった野菜の姿はこれまで真っ先に目につく光景であったが現在は活用されていない事が残念であり、今後も戸外に出る一つの機会として、出来得る菜園作りに努めていける事を期待したい。

**V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します**

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当する項目に○印
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができています (参考項目:9,10,19)
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、活き活きと働いている (参考項目:11,12)
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	開設当初から変わることなく、職員の中に自然と理解されており、簡潔な言葉でわかりやすい表現となっている。ミーティングの際には参加職員で唱和し振り返りを行っている。今年度はコロナ感染症の感染防止の為、園外活動などが行えなかったが、理念に沿った支援となるようにできることから取り組んでいる。	開設当初からの理念であり、「個人を尊重」「地域と共に」「仲良く、楽しく」の三項目はケア指針として、ホーム内への掲示や唱和により職員の中に浸透している。人員不足が叫ばれる業界にあって、ホームでも入職にあたっては認知症高齢者に理解のある人材を求めており、人材確保を課題としながら、まずは入居者が安心して過ごせるホーム運営を心掛けている。	理念は運営推進会議を通じて地域へ向け啓発し、ヒヤリハットや事故報告などを詳細に伝える事で、ホームの姿勢に理解が得られている。新年度に向け、理念について振り返りの機会を持たれることを期待したい。
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	回覧板で地域の情報を共有し、自治会にも加入し地域の活動にも積極的に参加できるように努めている。10月には区の防災訓練にも参加し、防災について互いに理解を深めることができた。12月には園外活動ができない状態が続いていた為、感染対策を行った上で、ギターやハーモニカの演奏会のボランティア訪問に来て頂き披露され、喜ばれていた。	地域行事の中止や、外出の機会が制限される中、できることで地域交流に努めている。自治会の清掃活動に毎月参加する他、地区の防災訓練ではブルーシートを使った担架づくりや、防火用品の説明を受けており、ホームでの訓練にも反映されるものと思われる。	ここ数年ホーム周辺は住宅が立ち並び人口も増加している。コロナ終息後の新たな地域交流にも期待したい。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	ボランティア訪問時に地域の方にも参加して頂き、利用者との交流の機会を作っている。今年度はコロナ感染症の感染防止の為、運営推進会議を行うことができず、勉強会など意見交換を行う事ができなかった。	/	/
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	今年度はコロナ感染症の感染防止の為、運営推進会議が行うことができず、勉強会など意見交換を行う事ができなかった。運営実績報告、施設内で行った行事報告、事故やヒヤリハットなどの報告は、広報誌を作成し、事故などについては文書にしてまとめ。2か月に1度、郵送し、随時報告を行った。	令和2年1月の運営推進会議のホーム開催を最後に、その後は書類審議にて行政や地域代表、家族等に書面にて報告している。運営状況や入居者の現状、ヒヤリや事故などについて詳細に報告し、家族からヒヤリハット後のホームの対応について、「安心している」との声があがっている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	昨年は運営推進会議に市職員の方にも参加して頂き、施設の状況、利用者の方々の様子等報告したが、今年度はコロナ感染症の感染防止の為、運営推進会議を行う事が出来なかった。感染症が流行してからは、感染状況の有無など報告し近況を伝え、手袋やアルコール、マスクなど不足していた為、支給して頂いたことで感染対策に取り組むことができた。	コロナ禍以前には行政の担当者が運営推進会議に参加しており、直接ホームの現状を確認してもらうことで適切な意見が得られている。現在は、資料を行政に届け相談事に応じてもらうことで信頼関係を築いている。この1年は感染症拡大に伴うやり取りや、物資の配布などが主に行われている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	毎年、身体拘束について勉強会を行い、拘束のない介護に向けて、職員一同で取り組んでいる。身体拘束について毎月カンファレンスを行い、拘束に当たる行為はないか、ケアは適切か話しあい、検討する機会を設けている。また、運営推進会議後、市職員や区長、ご家族にも参加して頂き、拘束適正化検討委員会を行い、拘束について意見交換を行っている。今年度は感染拡大防止の為、運営推進会議が行えず、検討委員会も行うことができていない。離設行為が頻回にあった場合のみ玄関等の施錠を行ったが、ご家族にも説明し了承を得て、可能な限り付き添うことで対応している。日中は自由に外へ出ることができ、散歩や外気浴など活動することができる。	共有空間に身体拘束0宣言を掲げ、拘束を行わないケアを念頭に支援している。コロナ禍以前は研修会やミーティングの内容を運営推進会議の適正化委員会でも報告し、離設者への対応などを通じてホームの姿勢を伝えている。スピーチロックについては、入居者の繰り返しの言動に語尾が強くなることがあるとしている。	スピーチロックについて勉強会での共有とともに、職員の精神的フォローにも心を配りたいとしている。継続した取組を期待したい。
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	身体拘束と同様に虐待についても勉強会を行い、施設内での虐待防止に努めている。身体的な虐待、精神的な虐待についても職員間で都度意見交換しながらケアに努めている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	ご家族が成年後見人制度を利用され、権利擁護や成年後見人制度についても、改めて勉強会を行い、理解を深めた。定期的に後見人の方が面会に来られ、ご家族とともに現状や近況について報告している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
9		○契約に関する説明と納得  契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入居の際に契約に関してご家族が納得されるまで、不安や疑問点について説明している。入居後も家族の不安や疑問にはいつでも相談を受け、すぐに対応できるようにしている。加算や利用料についても詳しく説明し、歯科の往診や理美容費なども細かく説明し、了承を得た上で行うようにしている。受診対応なども、ご家族の希望にできる限り対応できるように努めている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	苦情相談窓口や家族意見箱を設置し、いつでも苦情や意見が出せるようにしている。市役所や国保連の連絡先も掲示している。運営推進会議の場でも家族の意見を聞くようにしている。今年度は会議が行えず、面会時や電話連絡などで意見を聞き取り、職員間でも共有した。利用者については日常の会話の中から意見をくみ取るようにしている。月に一度市の相談員が来園し、利用者の意見や話を聞くことで、要望や希望など聞き取りすぐに対応できるように努めていたが、令和2年1月より相談員制度を終了したため、現在は職員によりくみ取るようにしている。	運営推進会議や面会、電話などで家族の意見や要望を収集している。現在も面会の制限はしておらず、希望があれば応じている。家族参加の外出(食事会)で、顔なじみになられた方も多く、家族同士の仲もよく「今度の食事会はいつですか〜！」と再開を楽しみにされる方もおられる。入居者の要望は普段の関わりからくみ取り、個別外出などに繋がっている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	月に一度のミーティングでは職員の意見や提案を聞いている。それ以外でも何か意見や提案、要望などあれば、いつでも相談に応じるようにしている。勤務形態も希望に応じて、勤務表を作成するなど対応している。	管理者やケアマネジャーは夜勤専任者や、土日のみ食事作りに入る職員など、それぞれの時間帯に勤務する職員との連携を図り、意見や要望を聞き取り個別相談に応じている。例年であれば、グループホーム連絡協議会の研修参加など、同業者との交流を後押ししているが、本年度は稼働しておらず再開が待たれる。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	常に職員の勤務状況を把握し、休みや欠勤はチェックし、個々の動きにも目を配っている。仕事の内容や動きに応じて役割担当を決め、責任ある仕事を担当してもらっている。休日希望も各個人より聞き取り、家庭環境、勤務形態、勤務時間など考慮した上で、職員の希望に沿った勤務となるように配慮している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	グループホーム連絡協議会や鹿本・菊池ブロック研修会には職員のレベルに応じて参加するように呼びかけ、可能な限り参加している。参加後は伝達講習の場を設け復講を行っている。今年度は感染拡大防止の為、行われず参加できていない。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	鹿本・菊池ブロック会議には必ず参加するようにしている。又、同業者との交流の機会がある時には、積極的に参加するようにしている。電話連絡も活用し情報交換する機会を設けた。		
<b>II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	本人の話を聴き、今困っていること、不安に思っていることなど知り、言動や表情などからも察知し把握するようにしている。生活歴や性格、今までの経験やできていたこと、やりたいことなども聞き取り、全職員が必要な情報を把握できるように周知している。理解した上で希望に応じてできることを生活の中に取り入れ、職員も関わりながら、新しい環境に少しずつ馴染み、安心して生活ができるように支援している。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族にとっても入居してからの不安や悩み、困っていることや希望など入所前から聞き取るようにし、以前からの習慣や出来ていたこと、やりたいことなども聞き取り把握するようにしている。聞き取り、施設としてどのように取り組んでいかも検討し伝え、納得して頂けるようにしている。入所後も不安になられることのないように現状を伝え、入所後に感じた疑問点や希望、お困りごとなども聞き取り、話をしながら都度希望に沿えるように支援している。ご家族にとっても安心して利用者を任せることができる施設となるように努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	入所を検討し相談に来られた際は、本人、ご家族の話をよく聴き、本当にグループホーム入所が必要であるか判断している。入所後も本人やご家族にとって必要な支援を随時、話しあいながら行っている。他のサービスや、手続きが分からない等の相談があった際は説明を行い、本人やご家族にとってよりよいサービスを紹介している。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	今までの生活歴から利用者一人ひとりのできること、得意なことを大切に、掃除、食事の配膳や盛り付け、洗濯物たたみや裁縫など、職員と一緒にできることをお願いしている。役割を持つことで安心されたり、生活の張りにつながっている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	例年、いつでも面会できるようにし、施設の行事にもできる限り参加して頂き、家族との交流、触れ合いの場を設けていたが、コロナ感染症の流行後は面会制限を行い、行事への参加も控えてもらう等の対応が必要であり、面会の機会は例年に比べると少なかった。感染対策を行った上で一番近い家族の方に限定して面会を許可し、玄関先での短時間の面会や、受診の際に付き添い対応してもらうことで家族の方と会話する機会を作る等の対応を取り入れた。例年に比べると関わりも少なかった。現在も感染対策を行いながら可能な限り面会できるように配慮している。職員ともゆっくりと話しができる雰囲気作りを努め、必要時は電話連絡して、近況や現状を報告している。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	例年、家族だけでなく友人、知人の面会時もゆっくり過ごして頂けるように配慮しているが、コロナ感染症流行後は、家族以外の方の面会は制限しており、今年は過ごす機会ができなかった。本人が希望した際は、家族に相談し自宅に帰り自宅内を確認したり、墓参りをされる方もいた。	現在、面会は家族のみに限定している。入居者家族の希望や感染症の状況を見ながら、正月の帰省や墓参りなどが実現している。100歳の誕生日を家族と祝われた方もおられる。畑仕事を自身の役割として精を出されていた入居者も、年月を重ね関わりがなくなっているが、購入したばかりの長靴で洗濯をされる姿にホームでの生活ぶりが窺える。馴染みの訪問美容による支援は継続されており、入居者が楽しみにされている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	居室以外で利用者が一人にならないように、体操やパズルやレクリエーションなど一緒に活動するようにしている。カラオケや音楽鑑賞など、希望にも随時応じている。家事手伝いや掃除など、個人個人ができること、やりたいことなども随時取り入れている。ソファやリビングの席も利用者の性格やその時の状況に応じて考慮し、仲のいい利用者同士でゆっくり会話している光景も多くみられている。		
22		○関係を断ち切らない取り組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	サービスが終了するときは入院となることが多く、入院中は職員が定期的にお見舞いに行っていたが、今年度はコロナ感染症感染防止の為、面会できず、家族の方も面会できない状態が続いている。家族の方と連絡を取り合い、情報を共有しながら、経過観察、状況把握に努めている。帰園後の受け入れ態勢についても随時説明し報告している。残念ながら亡くなられた時には葬儀にも参列しお別れをしている。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	入居の際に得た、本人のこれまでの生活歴や生活情報、本人との会話の中で希望や意向をくみ取り、できる限り思いに沿えるように支援している。家族に話された希望なども家族の方から聞き取ることで、把握するようにしている。必要な情報は全職員に周知し、把握した上で、支援の方法などを検討している。	入居者のこれまでの生活歴や入居後の会話、行動から暮らし方の希望や思いをくみ取り、プランに反映している。理解や判断困難な入居者については、家族の意向やホームでの関わりから本人本位に近づこう努力している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	これまでの生活や習慣等あれば、できる限り継続できるように、入居の際に、これまでの生活情報を本人や家族に聞き取り、把握に努めている。病院や居宅からの紹介であれば、必要な情報を得て把握に努めている。日課とされていた掃除や散歩も毎日の生活に取り入れることで、活動的な生活を送ることもでき、安心する方もいた。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	毎日の介護記録やバイタルサインのチェック、申し送り等の情報、一緒に過ごす中で、表情や言動、口調等の観察により、細かい変化にも気づけるように、心身の状態観察に努めている。できることは可能な限り自身で行えるように支援し、洗濯物たたみや、掃除など取り入れたりしている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	面会の度に現状を報告し、介護方法や支援の経過報告を行っている。その都度、現在の不安や心配ごと、希望や意向について家族からも聞き取り、くみ取るようにしている。面会制限後は、電話で連絡し、現状報告行いながら、希望や意向について確認、把握できるように努めている。本人及び家族の意向と本人の現在の状態から、課題を分析し、ミーティングや会議の場で意見を出し合い、計画を作成している。	計画作成担当者は家族の面会時や電話で入居者の現状を伝えながら、意見や要望を聞き取りプランに反映するようにしている。入居者の病状を把握、理解したうえで訴えに対しては寛容に受け止め、否定せず出来る事で自信を持ってもらうような内容を掲げている。家族からも事前の話し合いやプラン説明が十分だとの声があがっている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日勤帯、夜勤帯で日々の様子や、実践したケア、状況、職員が気づいたこと、気になったことなど、個別記録に記入している。表情や言動、行動についても詳細に記載し、個別記録から情報を共有することで、統一したケアの実践や介護計画の見直しにつながっている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	高齢であり、様々な病気や口腔内の問題を抱えている利用者が多い。口腔内の問題を歯科の訪問診療を利用し、口腔ケアの充実に努め、異常があり抜歯等の治療を行った方も経過良好である。訪問看護も導入し、夜間転倒し処置が必要な方に訪問看護師に来院してもらい処置して頂いたこともあった。熱発された際はかかりつけの内科医に訪問診療してもらい、治療をより早く行うことができた。訪問理美容では髪染め、顔そり、カットなど個人の希望に応じてお願いし、おしゃれを楽しまれている。		



自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	所在する地域の住民の方による歌やギター、ハーモニカの演奏の慰問に来て頂き、楽しい地域交流の機会となった。地域の防災訓練にも参加し、防災について情報を共有し、必要な準備物や避難の方法など、相互に理解を深めることができた。散歩中に出会った地域の方と会話することもあり、喜ばれていた。離脱し行方不明になった方がおり、地域の警察にも相談し捜索を依頼。無事にすぐ発見することができた。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入居時にかかりつけ医への受診方法を家族と相談し、家族、または事業所に対応している。緊急を要する場合は事業所に対応している。現在の状況を家族へ報告し、現状や病状の変化、バイタル、食事量、夜間や排泄状況など記載した受診報告書を作成し、主治医へ報告、相談を行っている。主治医と面談が必要な場合は、本人と家族と一緒に職員も同行し、送迎の支援や状態報告を行っている。異常があった場合は内科医の往診を依頼された方もいた。すぐに診察して頂き症状の回復が早かった。歯科、眼科、耳鼻科、皮膚科、整形外科と症状や状態に応じて定期受診されている。	入居時にかかりつけ医や受診方法を確認し、家族やケアマネジャーが同行支援し結果を共有している。中には医療機関で待ち合わせる等状況に応じ対応している。高齢などを理由に通院への負担を考慮して、往診への対応に変更された方もおられる。月2回の訪問看護も行われており、家族や職員にとっても安心となっている。職員は排泄や食事、歩行状態など個々の身体状況を共有し、異常の早期発見に繋げ、必要に応じて主治医へ報告している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	訪問看護を導入し、24時間連絡が取れる体制をとり、緊急時はすぐに訪問依頼し、訪問後処置や状態観察等が行われている。毎朝のバイタルサインのチェック、一般状態の観察を行い、日頃の様子と違うことがあれば、訪問看護師に報告し相談している。受診の必要があるか、必要な対応はないか相談し指示を受け、異常の早期発見となるように園での様子も細かく報告するようにしている。病院受診の際も必要な情報を職員が家族に伝え、主治医に受診報告書を作成し渡すことで、現状報告が確実に行えるようにしている。受診後も内服薬の変更や指示があれば、全職員に周知し、把握できるようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院中は利用者の居室を把握し、定期的に病院へ出向き、治療の経過観察、現状の把握を行いながら、退院に向けて病院や家族と相談している。入院中、食事が入らない方には園での食事摂取状況を伝え、声掛けの方法や、見守り方など伝え支援の方法を共有することもあった。現在入院中の方もいるが、感染症感染防止の為、面会制限されており面会できず、退院に向けて園での意向や受け入れ態勢などを家族に伝え、都度、家族から現状を聴き把握するようにしている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居の際や定期的に看取りに関する指針を説明し、事前指定書にて家族や本人の意向を確認している。看取りになった場合の往診医の意向も確認し、都度、園での看取りについて往診医の意向も併せて家族に説明するようにしている。利用者の多くが看取りを希望し、終末期となり訪問看護や往診が必要となった場合には、家族と相談し、職員、医療関係者、家族と連携してできる限りの支援ができるようにしていく方針である。看取りを希望しておられ、夜間老衰により急逝された方がおり、最期は家族に看取られることはなかったが、最期まで自分で食事を摂り、歩き、トイレにも行き、眠るように穏やかに亡くなられたことで、家族は「本人にとっていい最期だった」と言われていた。	入居時に看取りに関する指針をもとにホームの取組を説明し、事前指定書で本人・家族の意向を確認している。また、思いは変化するものであり、状態変化が生じた時点でその都度聞き取り、往診対応なども含めて方向性を話し合っている。重度化・終末期支援については、職員のメンタル面にも配慮しながら研修会を開催している。これまで医師や職員の連携によって実際看取り支援を行った際、家族から感謝の言葉が寄せられ、職員も安堵しながら振り返りを行っている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	緊急時対応マニュアルに沿って職員が対応できるように周知している。今年度はコロナ感染症の感染拡大防止の為、消防署の訪問はなく、心肺蘇生法、AEDの操作方法について勉強会を行い、再確認を行った。緊急時に目のつく所に操作方法を掲示し、慌てず対応できるようにしたい。当園にAEDはなく、急変時は心肺蘇生法を優先するように職員間でも話し合っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	毎年消防署に依頼し、日中、及び夜間想定での避難訓練、消火訓練を行っている。今年度はコロナ感染症の感染拡大防止の為、消防署の訪問はなかったが協力を依頼し通報訓練を行い、同日に避難訓練、消火訓練を行い手順や避難方法など再確認を行った。火災に加え、地震や台風で避難することも想定し、職員同士で話し合い、実際の災害時に行う防災対策や避難に車椅子が必要な方、緊急時はシートを使用しての避難も考慮することなど確認した。また、地域の防災訓練にも参加し、日頃から地域の方の協力が得られるように、意見交換したり、互いに情報共有することから取り組んでいる。	今年度は10月に地域との防災訓練に参加し、災害に備えブルーシートや物干しざおを使用し搬送する方法、非常用備品など防災について再確認を行っている。また、11月には昼間想定での避難訓練を実施し、訓練の様子は広報紙でも紹介されている。日々の安全管理はコンセントの埃を含め、チェック表で確認することで職員の意識を図っている。	災害時の備品についてはある程度の確保を行っているが、食については現在、缶詰が主のようであり、今後は見直しを行いリストに沿って管理をされる必要があると思われる。
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	目線の高さを合わせ、一人一人の思いや生活過程を尊重した言葉かけや対応を心がけ支援している。言葉づかい、声の音量、トーン、語尾にも配慮し、職員間で気づいた時には注意しあい、よりよい接遇に努めている。表情や言動、行動も常に観察し、細かい気分の変化にもすぐに気づきできる限り思いに寄り添い対応できるように、努めている。	職員の思い込みや都合を優先することなく、希望を確認し支援することとしている。口頭で伝える事が出来ない方には、表情などからくみ取っている。呼称は苗字にさん付けを基本とし、言葉使いや声のトーンも特に語尾に注意を払うよう共有している。	管理者は職員の声掛けや支援方法など気になることは指導しているが、職員同士でも注意し合える関係性がさらに必要としている。今後も職員の発する一言の影響について振り返りながら、日々の業務にあたっていかれることを期待したい。
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	本人の希望を確認した上で、支援を行っている。言葉では希望を伝えられない利用者に関しては、表情や口調、行動から思いを察しながら支援している。独語から思いを感じ取ったり、落ち着きない様子の時は、個別でゆっくり話を聞くなどしている。様々な活動にも参加は自由であり、やりたい活動を個人個人が行えるように支援し、希望や決定を尊重している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	一人ひとりの生活のペース、リズムを職員は把握しており、それに合わせた支援を心がけている。排泄間隔や行動パターンも把握するようにしている。本人の希望やしたいこと、できることを本人のペースで自分で行うことができるように支援することで、生活の張りにつながっている。時間はかかっても意欲が見られれば、声掛けし見守りながら、一つでも多く自分でできるよう支援している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	訪問理美容を利用しており、カットやカラー、顔そりをしている利用者もおられる。訪問の度に希望を聴き、カットやカラー等お願いしている。希望により他店に行き、理美容の為外出する方もいた。外出や入浴時など好きな服を選んで着てもらったり、化粧をする方、入浴後に顔のお手入れをする利用者もいる。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	昨年度より食事メニューの管理や食材の準備等を業者に依頼し、管理栄養士がたてた栄養バランスのいい献立メニューを取り入れている。行事食も今まで同様に取り入れ、季節に応じた献立を提供している。水曜日には食材を発注せず、食べたい献立を取り入れ毎週リクエストに応じた献立を提供できるように工夫している。今年度は花見ができずドライブのみとなってしまう、例年のような家族と一緒に花見をすることはできなかった。帰園後にはお花見弁当を提供し喜ばれていた。家族会も行えず、楽しみにされていた近隣のレストランへの外出も行うことができなかった。その為、園でできる行事や行事食にはとても喜ばれており、おやつなど種類を多く提供したり、食べたいおやつを聴きリクエストに応じて提供するなど楽しみにつながるように心がけている。お正月にはおせちやお屠蘇、お雑煮を提供している。台ふきや、お盆の準備、盛り付け、配膳等、それぞれできる所を職員と一緒にいき、みんなで一緒に食べながら、楽しく食事の時間を過ごしている。	これまで職員による献立作成や食材の購入を開設当初から取り組んできたが、人員配置などの点から献立や食材配達が業者によって行われている。調理専任者2名を中心に行われており、手作りの料理が提供されている。月1~2回は変更メニューとして、お好み焼きやパンとシチューの日など、入居者の希望を取り入れ食事を楽しんでもらっている。また、おせちをはじめ行事食は変わらず提供できるようにしている。台拭きや配膳をはじめ出来る事で入居者の食への関わりを支援しており、職員も同じものを摂ることで思いを共有しており、業務への活力ともなっている。	コロナ感染症の影響により花見や地域レストランでの食事会等が中止されており、家族からも再開の要望が出されているようである。感染症の早い終息が待たれるところであり、今後も家族と一緒に楽しめる食事支援について、職員のアイデアを温めていかれる事を期待したい。
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	一人ひとりの咀嚼、嚥下状態、好みに合わせた食事を提供し、摂取量も毎食チェックしている。常食、一口大、刻みなど大きさ、硬さにも留意し、主食量も個別に把握し提供している。水分は、毎食時、10時、入浴後、15時、20時、希望時には随時、飲み物を準備し、それ以外にも自由に飲めるようにしている。甘酒やジュース、牛乳、栄養ドリンクなど希望時に飲用されている利用者もいる。飲水量が少ない方もおり、少量ずつ促し、スポーツドリンク、白湯など希望や状態に応じて取り入れている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
		口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	歯科の往診にて必要があれば、ケアの方法など相談し指導のもと、毎食後口腔ケアを行っている。歯ブラシを準備し自分で残菌や義歯を磨いて頂き、不十分な場合のみ声掛けや介助を行っている。コップや道具も定期的に洗浄、消毒し、義歯も洗浄液にて定期的に消毒を行っている。その際に義歯の磨き残しの確認、汚れがついていたり磨きが不十分な場合は職員が洗浄し、清潔の保持に努めている。残菌がぐらつき都度痛みの有無の確認等行っていたが、歯科医の判断にて抜歯され、義歯調整行われ、抜歯後も熱発や痛み等なく経過良好である。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	夜間、リハビリパンツを使用している利用者もいるが、日中は布パンツのみになる方、尿取りパットを使用する方と個人個人に合わせて使用し、トイレ誘導を行っている。排泄チェック表を記入し、排尿間隔を把握し時間誘導を行うことで、トイレでの排泄継続につなげている。本人のトイレで排泄したいという希望により、夜間のみポータブルトイレを使用する方もいるが日中はトイレで排泄されている。	排泄支援の状況は職員間で共有を図り、個々に応じた支援に努めており100歳の方を含め、殆どの方が日中は布パンツ（尿取りの併用もあり）で過ごされている。トイレは3か所設けられており、居室の近くや使い慣れた場所を使用されている。「夜間もトイレにいきいたい」との要望から安全面にも配慮して、ポータブルトイレを使われる方もおられる。可能な限りおむつやリハビリパンツに頼らない支援は、個々の尊厳や意欲、また家族の負担軽減にも繋がっている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	高齢であり、腹圧の低下、腸の動きの低下等考えられ、毎日のラジオ体操、菊ちゃん体操、歩行運動をかかさず行っている。また、排便体操を取り入れたり、牛乳や乳製品、こまめな水分補給を促している。排便間隔を把握し下剤を服用することなく自然排便となるよう排便の可能性が高い日はトイレ誘導を行い、排泄を促している。共同生活の中で、介助が必要な方も多く、ゆっくりと着座できるように誘導場所を考えたり、排泄時は気にせず排泄できる位置で見守りを行う等、誘導する際も配慮し工夫を行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	入浴日や回数は決めているが、利用者の希望があればいつでも入浴できるようにしている。入浴する、しないは本人の意思を尊重するが、入浴できる状態で拒否が続く場合は、健康、衛生面を考慮し、時間をずらす、朝に促す、職員が代わって対応する、シャワー浴、足浴を行う等試み、職員が話をし納得した上での入浴につなげている。家族と毎週温泉に外出する方もいたり、入浴剤を使用する方もいた。男性職員が介助することに抵抗がある利用者には、女性職員が介助を行うように配慮している。	午後の時間を中心に週3回湯船での入浴を支援しているが、中には毎日入られる方もおられる。また、心身の状況から湯舟とシャワー浴の日が半々ぐらいの方など、個々に応じて対応している。職員の声掛けでスムーズに入られる方が殆どであるが、管理者は拒否があっても無理強いや職員の都合にならないよう伝えている。	これまで柚子湯支援では購入や差し入れなどを活用してきたが、楽しみの一つとなるよう柚子の木が植樹されている。自前の柚子で入浴支援の幅が広がることを期待したい。
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	夜間の睡眠状態、排泄状況を把握し、不眠や不穏等あれば、日中の様子を観察し、活動や生活のリズムを整える支援を行っている。夜間のみ浅眠になる方もいたが、徐々に落ち着いてこられている。日中、ソファや自室で午睡する方もいるが、長時間をならないよう配慮し、一人ひとりのペースやリズムに合わせてゆっくり休息がとれるように支援している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	服薬は一人ひとり1回分ずつまとめ、日付や名前を明記している。1回分の薬を2名以上の職員で確認し、セット時に3回と服薬直前にも再確認し、読み上げ確認も行っている。本人に手渡し服薬後、吐出しや落下などないか、確実に飲み込まれるまで確認している。その都度内服薬の変更があれば、連絡ノートを活用し職員へ周知している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	毎日の掃除や食事の準備、洗濯物たたみ、裁縫等、生活歴からその人のできることを、得意なことを職員と一緒に取り組んでいる。散歩したり、作品作りをしたり、カラオケをしたり、一人ひとりに応じたレクを行い、楽しみをもつことができるように支援している。昨年は干し柿づくりを行いおやつの時間に完成した干し柿を味わい、喜ばれていた。誕生日の月には誕生日会を行い、全員でお祝いしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	天気の良い日には外気浴を行い、近隣へ散歩に行ったり、近所のお店で買い物をしたり自由に外出できるようにしている。ご家族の支援にて温泉や外食に出かける利用者もおられ、お彼岸や命日には墓参りに行かれている利用者もいる。今年はコロナ感染症流行により、花見や園外活動が行えず外出する機会が少なかった。例年参加できるご家族には一緒に参加してもらい、楽しい時間を過ごすことができるように支援している。	コロナ禍の中にあり以前のような外出は困難になっているが、状況を見ながら個別で畑作業用の長靴の購入や敷地内の散歩、日光浴などを支援している。訪問当日も好天の中、庭先で自身の衣類などをいつものように洗濯される入居者の姿が見られた。また、100歳の祝いを家族と外出し、早めに行われた方もおられる。外出を控える時期も対策を十分行い、ギターやハーモニカ演奏のボランティアによる交流が行われ楽しいひと時を過ごされている。	これまで菜園の管理を一手に担ってこられた入居者が、以前のような取組が出来ず菜園の活用に至っていない事は残念に思われる。その方の口頭でのアドバイスなどが可能であれば、手軽に育てられる野菜の種まきや苗植え、水やり、収穫など全員が戸外に出るきっかけとなっていくことを期待したい。
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	お金が管理できる利用者には、管理できる金額が入った財布を自分で管理してもらい、自由に買い物に行ってもらっている。自己管理が難しい利用者は家族と外出時に買い物して購入されている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	電話はいつでも家族や知人にかけることができる。自分でかけることができない利用者は職員が代わりにかけて、話をしてもらっている。かかってきた際もゆっくり会話できるように配慮している。ご主人へ毎週はがきを出す利用者もおられた。毎年、年賀状を職員と一緒に作成し、できる方には自筆で文面を記入してもらい、家族へ送っている。家族からも年賀状や手紙が届くこともある。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	玄関やベランダにはゆっくり座って外を眺めることができるようにソファやベンチを置いている。リビングや廊下には季節行事の写真や利用者の作品を掲示し飾っている。リビングではみんなで食事を楽しんだり、ゆっくりテレビを見たり等できる空間になっている。共同空間はいつも清潔に保ち、気持ち良く生活できるようにしている。現在は毎日、換気、共有空間の消毒を行っている。	リビング食堂は、入居者が食事をはじめ日中の大半を過ごす場所であり、ゆっくりテレビを見たり寛げるよう配慮している。夏場は時計草が日よけになったり、台所からリビングの窓までの長さを活かした流しソーメンなど、季節を味わえる取組が継続されている。廊下には季節の掲示物や広報誌にも使用する写真を掲示しているが、家族が安心されるよう平等に掲載している。感染症への対策として消毒を含めた掃除や換気の徹底は、これまで以上に細やかに取り組んでいる。	掲示物については、変色や内容の確認(重要事項説明書など)を含めて定期的な見直しが必要と思われる。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	自室にて過ごす方、雑誌や歌の歌詞が書いてある本を見ながら口ずさんだり、ソファでテレビをみたり、作品作りをしたり、一人ひとり自由に過ごされている。ソファなどで隣に座ると自然と会話され交流の機会となっている。職員も支援する中で大きな音や大声は出さないようゆっくりと過ごせる空間づくりに配慮している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	ベッドは施設で用意しているが、他の物は自由に好きなもの、馴染みのものを持ち込むことができる。家族と相談しながら、本人が使いやすい物、今まで使い慣れている物を持って来てもらい、自宅と同じように寛いで過ごすことができるように支援している。	入居時にベッドなどホームで準備されている品と、本人にとって馴染みや使い慣れた物品の持ち込みについて説明をおこなっている。自らタオルを手洗いし、居室に干されている方、趣味である詩吟のカセットテープを持ち込まれている方など、自分の部屋として過ごされている。家族の面会が控えられており、居室内の掃除や衣類の管理など現在は、職員が中心に行っている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	屋内はバリアフリーで車椅子の移動もできる。廊下やトイレ、浴室、リビングの必要な個所には全て手すりを設置している。居室の入口には希望に沿って名前や写真を掲示し、自分の居室をわかりやすくしている。トイレの表示も大きくし、間違えずにトイレに行くことができる。		